

大学での遠隔授業と対面授業の 英語授業実践

動機づけの観点から

今 村 梨 沙

Abstract

This study explores students' preferences of class styles under the COVID-19 situation. It also examines whether an English course which utilizes the topic of a specialized field motivates students or not.

Research questions of this study were two-fold: (1) How do the students whose majors are Japanese culture and literature feel about the English class which makes use of Japanese culture? (2) Which class style do students prefer, distance learning or face-to-face classes?

The participants were 33 first-year university students who majored in Japanese culture and literature. They took distance learning classes including “flipped classroom”, meaning that students watched videos or materials outside class and discussed or worked on a project together with classmates via live-streaming classes in the spring semester; on the other hand, they had face-to-face classes in the fall semester.

The result of the questionnaire showed that students felt the contents of the classes which treated Japanese culture were meaningful and fun for them. It was also clarified that students preferred face-to-face classes over distance learning. This study implied that using materials which were related to their majors would motivate students and face-to-face classes accelerate cooperative learning. It is also suggested that teachers would be required to blend the advantages of distance learning and face-to-face classes.

1. はじめに

1. 1 研究背景

2020年は、世界的な新型コロナウイルス蔓延により、授業形態を模索し始める学校が急増した年となった。それに伴い、突然のオンライン授業に悪戦苦闘の日々を送った学生や教員も少なくないだろう。文部科学省（2020）によると、7月1日時点で約6割の大学¹が2020年度春学期の授業は対面授業²と遠隔授業を併用して実施していた。筆者が担当した複数の大学のすべての授業が、遠隔授業形態で実施することとなった。遠隔授業でも同期型と非同期型があり、本研究の対象としたクラスは、同期型と非同期型を組み合わせたブレンド型の遠隔授業形態をとることにした。また、秋学期の授業形態は、対面授業となった。

そこで本研究では、英語の授業形態として、同期型・非同期型を併用した遠隔授業と新型コロナウイルス感染防止策を講じながらの対面授業のどちらかを大学生が好むかを探る。また、授業内容に関しては、学部にて特化した内容を扱うことが、学生の英語学習の動機づけの一助となりえるか探求する。

2. 先行研究

2. 1 アクティブ・ラーニングの必要性

文部科学省の2012年8月の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）」の中の「学士課程教育の質的転換」において、次のように述べられている。

…従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要であ

る。(p.9)

また、アクティブ・ラーニングを用語集にて次のように定義している。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。(p.37)

さらに、「アクティブ・ラーニング」を取り入れるだけでなく、学生の専門分野に関わる事柄を英語学習のトピックとして扱うことも文部科学省は重要視しており、2008年の「学士課程教育の構築に向けて（答申）」の「大学に期待される取り組み」には次のような記述がある。

英語等の外国語教育において、バランスのとれたコミュニケーション能力の育成を重視するとともに、専門教育との関連付けに留意する。... 専門分野を学ぶために必要な語学力の修得を目指した教育活動を展開する。(p.16)

学生の専門とする分野をトピックとして、学生自らが考え発信する発表や学生同士の意見交換が求められていることがわかる（天野、2014）。大学で専門分野を英語で学ぶことは、主として ESP (English for Specific Purpose) と呼ばれ、日本語では「特定の目的のための英語」と訳され、学んだ専門分野に関する知識が将来の仕事に繋がることが多いため、英語学習者の動機づけ向上に役立つ傾向がある（武知、2014）。ESP を本格的に導入

するためには、ニーズ分析を行い、カリキュラムに導入する必要があるため、大学または学部・学科規模で取り組む必要があり、教員一人だけで実践することは困難と考えられる。しかしながら、一つの科目の中で教材や授業内の活動に専門分野のトピックを扱うことは可能である。したがって、遠隔授業になっても、大学において、専門分野の学習内容を扱い、アクティブ・ラーニングを取り入れた英語の授業をする必要性があると言える。

2. 2 反転授業の可能性

文部科学省（2013）は、アクティブ・ラーニングを実現する方法の一つとして、反転授業（flipped classroom）の実践を挙げている。反転授業（flipped classroom）とは、Baker（2000）の“Classroom Flip”を起源としている（森、2016；濫川、2020）。Baker（2000）は、授業内において、教員が行う講義時間を減らし学習した内容を理解し応用する時間を増やすことと、授業時間外に講義資料を閲覧しオンラインで学生同士に意見交換させることを奨めた。この理論を実践したのが Bergmann and Sams（2012）であり、講義部分をビデオに録画し、学生はそのビデオを授業外で見てから授業へ参加し、授業内では従来宿題となっていた難解な問題を解かせて受講生同士の議論を行わせた。反転授業（flipped classroom）においては、必ずしもビデオが必要でないと考えられている（Bergmann & Sams, 2012；Talbert, 2017）。ビデオの代わりに、教員が作成した講義資料や指定した教材を読んだり閲覧したりすることも含まれるのだ。

本来、反転授業（flipped classroom）は、対面授業で実施される。しかし、2020年度春学期は、多くの大学で対面授業の実施が困難であったことから、それ以前から反転授業を実施していた授業は、オンラインで反転授業を行うことになった。井上（2021）は、反転授業とオンライン授業を調和させた英文法指導を行ったところ、学生が授業を高評価したことを報告しながらも、オンラインで反転授業を行う際は、学生の課題量が多くならないように事前

課題のアセスメントとフィードバックに注意することの重要性を主張している。

Ge, Chen, Yan, Chen and Liu (2020) は、近年放射線学の授業において、反転授業 (flipped classroom) が徐々に取り入れられていることを指摘し、2114名が参加した19件の授業実践報告を分析した結果、学生が反転授業を好む傾向を明らかにした。一方で、授業外時間で課題に取り組むことに対して負担を感じる学生がいることやグループワークの欠如に対する対策を考える必要があると主張した。学生同士の協働学習 (cooperative learning) は、主体的な学習態度を培い、学生の自信へと繋がる活動であるため (Dörnyei, 2001)、動機づけに関わる大きな要素であることがわかる。したがって、遠隔授業で反転授業 (flipped classroom) を取り入れる場合、担当教員による授業外の学習時間の使い方の提示をすること、そして、アクティブ・ラーニング、特にグループやペアでの活動をどのような形で取り入れるかということが重要になるといえる。

2. 3 専門分野を扱った内容と反転授業を取り入れた授業実践例

Furse (2020) は、教員による一方的な講義形式の授業 (“traditional lecture style”) が欧米の学生に受け入れられない傾向を指摘している。そこで、自身の電磁気学の授業でアクティブ・ラーニングを取り入れるために、講義の部分を事前にビデオで録画してストリーミング配信し、学生にそのビデオを見させてから授業に参加させた。教室内では少人数のグループ活動内でディスカッションをさせた。学生への質問紙調査の結果は、講義がある時とない時を比較して、講義がない “lecture free” (Furse, 2020) の時の方が学生の授業への支持率が高いことを明らかにし、反転授業の有効性を強調している。

今回調査対象とする筆者が担当したクラスの2020年度春学期の授業においては、反転授業の要素を取り入れた非同同期型・同期型をブレンドした遠隔授

業を実施した。非同期型では、学生は課題提出締め切りまでの都合のよい時間に、担当教員が学内 LMS にアップロードした文字による解説の資料を閲覧し、教科書の会話部分の動画をインターネット上のストリーミングサイトで視聴し、同期型では個人発表やディスカッションを無料ビデオ通話アプリ Skype にて行った（今村、2020）。第15回目の授業で授業形態に関する質問紙調査を実施し、非同期型と同期型を組み合わせた遠隔授業を学生がどのように感じたのか調査した。結果として、受講生33名中（有効回答28名）、24名がブレンド型の遠隔授業を支持し、理由としては、「リアルタイム型の授業があることで受講生と交流を持てた」（13名）、「非同期型でじっくり理解を深めて、リアルタイムで形にできた」（6名）、「メリハリがあった」（5名）が挙げられていた。同期型、非同期型のいずれかのみにするのではなく、双方をブレンドすることによって、学生は遠隔授業をある程度好意的に捉えていたことがわかった。同時に、遠隔授業における反転授業（flipped classroom）の可能性を見出すこともできた。

3. 調査

3. 1 調査の目的

これまで見てきたように、大学の英語の授業においては、授業形態に関わらずアクティブ・ラーニングを取り入れて専門分野の内容を扱うことが求められている。このような研究背景を踏まえて、本研究の具体的な Research Question (RQ) として、以下の2項目を設定した。

RQ 1 : 日本語および日本文化を専攻する学生は、日本文化を扱った英語の授業をどのように感じるだろうか。

RQ 2 : 遠隔授業と対面授業のどちらを学生は学びのあるものだと感じ、受講しやすと感じるだろうか。

3. 2 調査協力者および授業内容

調査協力者は、関西の私立大学に通う日本語日本文学専攻の女子学生1年生33名であった。対象者のクラスは、2020年度に開講されたスピーキングおよびリスニングに重点を置いた通年（全30回）の英語必修科目であった。習熟度別クラス編成の上位クラスとなる予定であったが、新型コロナウイルスの影響でプレースメントテストを実施することができなかつたため、スピーキングおよびリスニングのレベルは不明であった。

使用する教科書は、『Discovering Cool Japan 発掘！ かつこいい日本ー異文化理解から日本文化発信へー』（津田、金志、Valvona、2019）で、13ユニットから構成されており、各ユニットに外国人が日本文化を実際に体験して現地から英語でレポートしたり、そのレポート動画を見た日本文化に関心のある英語話者たちが自国の文化と比較しながら議論したりする動画が収録されていた。また、動画の内容に関して答える正誤問題、語彙問題、会話のディクテーション、トピックに関する設問が掲載されていた。筆者の授業では、通年でこの1冊を使用し、春学期はUnit 1～6、秋学期はUnit 7～13を実施した。しかし、春学期に関しては遠隔授業となり、新型コロナウイルスの影響で教科書を入手できない学生がいたことや動画と音声をアップロードする許可が著者から下りなかつた³ことから、教科書に沿って授業を進行することが困難となった。そのため、春学期の授業は、表1のように1ユニットを2週に分けて学習した。「担当教員が指定するトピック」は各ユニットに関連するものにした。

秋学期は全15回を対面授業で実施することができ、学生にも教科書が行き渡っていたため、教科書に沿って授業を進めた。春学期と同様1ユニットにつき、2週を費やした。動画に関しては、事前に見ることを課題とはせず、教室内で動画を流し、学生全員同じものを一斉に見た。視聴後にスクリプトを提示して各自での内容理解を促し、約20分後に担当教員がポイントを解説した後、正誤問題を解かせて、独自のディスカッショントピックを課して意

表1. 1つのユニットの進め方

	Week 1 (非同期型のみ)	Week 2 (非同期型+同期型)
Content of lessons	<ul style="list-style-type: none"> 教科書を入手した学生は教科書に収録されている動画を見て内容理解を進める。教科書をまだ入手できていない学生は担当教員が指定した動画に関連する質問についてインターネットで検索する(20分) 学内 LMS で解説を確認 (15分) ビデオを見た感想またはインターネットで検索して得た内容に関する感想と不明な点があれば書く[提出物1](15分) 担当教員が指定した Week 2 の個人発表のトピックについてインターネットでリサーチして、原稿を英語で作成[提出物2] (35分) 提出物1、2を学内 LMS 内に提出し次回授業スケジュールを確認 (5分) 	<p>〈同期型〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定されたトピックに関する英語での個人発表 (1人1~2分)および指定されたグループでディスカッションを実施 (20分) <p>〈非同期型〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表後、グループ全員の発表内容の要約と感想を英語で書く [提出物1] (30分) 担当教員が指定した課題についてインターネットで調べて英語でレポートを作成 [提出物2] (35分) 提出物1、2を学内 LMS 内で提出し、次回の授業スケジュールを確認 (5分)

見を書かせた。書いた意見を隣や前後の学生と発表させ合った。移動時に密接することを避けるため、グループやペアの入れ替え、毎回ランダムに組ませるといったことは避けて、その都度近くにいるクラスメイトと意見交換させた。また、春学期に同期型で行ったグループ内での個人発表は、新型コロナウイルス感染防止対策の観点から行わなかった。

3. 3 調査方法と調査内容

春学期と秋学期それぞれ最後の授業(第15回目)で受講者全員を対象に「振

り返りシート」と題して質問紙調査を行った（Appendix）。質問項目は今村（2015）を参考に作成し、「授業内容について」のQ1～6と「授業形態について」のQ1とQ3は、「5. 非常にそう思う」、「4. そう思う」、「3. どちらでもない」、「2. そう思わない」、「1. 全くそう思わない」の5件法で受講生に回答させた。「授業形態について」のQ2とQ4に関しては、記述式で回答させた。なお、質問紙の「授業内容について」のQ1～6に関しては、春学期と秋学期いずれも同じものを使用し、「授業形態について」は秋学期の質問紙のみ本研究の対象とした⁴。受講生は、学内LMSにアップロードされた質問紙のワードのファイルをダウンロードし、そのファイルに回答を入力してLMS上に提出した。

3. 4 分析方法

「授業内容について」のQ1～6に関しては、項目別に最小値、最大値、平均値、標準偏差を算出した。「授業形態について」のQ1とQ3に関しては、2つの回答の全体に対する割合を算出し、Q2とQ4に関しては、キーワード別に分類した。一人の学生が2つ以上のキーワードを含んでいる場合も、コメントの一つとして計算した。

4. 調査結果

4. 1 「授業内容について」Q1～6の結果

受講生33名中、春学期は28名、秋学期は27名の回答が得られた。Q1～6の結果を表2（春学期）と表3（秋学期）にまとめた。

表2. 春学期の質問紙調査「授業内容について」Q1～6の結果

Questions	Min.	Max.	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q1. 日本の文化を英語で表現することは楽しかったですか？	3	5	4.32	0.71
Q2. 日本の文化を英語で表現することは難しかったですか？	2	5	4.17	0.76
Q3. 日本の文化を英語で表現することにやりがいを感じましたか？	3	5	4.07	0.75
Q4. 日本の文化を英語で表現することで英語に自信がつかえましたか？	2	5	3.39	0.94
Q5. 学部に特化したテーマ（日本文化）を扱われていた英語の授業はわかりやすいと思えましたか？	3	5	4.17	0.71
Q6. 学部に特化したテーマ（日本文化）を扱われていた英語の授業はやりがいを持って取り組むことができましたか？	3	5	4.21	0.72

表3. 秋学期の質問紙調査「授業内容について」Q1～6の結果

Questions	Min.	Max.	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q1. 日本の文化を英語で表現することは楽しかったですか？	1	5	4.40	0.82
Q2. 日本の文化を英語で表現することは難しかったですか？	2	5	4.25	0.88
Q3. 日本の文化を英語で表現することにやりがいを感じましたか？	2	5	4.18	0.81
Q4. 日本の文化を英語で表現することで英語に自信がつかえましたか？	2	5	4.25	0.83
Q5. 学部に特化したテーマ（日本文化）を扱われていた英語の授業はわかりやすいと思えましたか？	2	5	4.22	0.83
Q6. 学部に特化したテーマ（日本文化）を扱われていた英語の授業はやりがいを持って取り組むことができましたか？	3	5	4.25	0.69

表2が示すように、平均値に関してはQ4のみ春学期は、3.39で4.0には至らなかったが、秋学期は全質問項目の値が4.0以上であった(表3)。表2と表3を比較すると、秋学期はQ4とQ6以外は、春学期より分散がやや大きくなったが、Q3の平均値は1.1伸びて、分散は減少し、Q6についても平均値が0.4伸びて、分散が縮小した。次に、秋学期の「授業形態について」Q1とQ3の回答の全体に対する割合を表4にまとめた。

表4. 秋学期に実施した質問紙調査の「授業形態について」Q1とQ3の全体の割合

Questions	Online (%)	Face to face (%)
Q1. 前期の遠隔授業(オンデマンド型とskypeを用いたリアルタイム型)と後期の対面授業、どちらの方が自分にとって学びのあったものだと思いますか?	14.8	85.2
Q3. 対面授業か遠隔授業のどちらが授業に参加しやすいと感じましたか?	18.5	81.5

表4が示すように、全体の85.2%の学生が対面授業の方に学びがあると感じ、81.5%の学生が対面授業の方が遠隔授業より参加しやすいと感じていた。

4.2 「授業形態について」Q2とQ4

「授業形態について」のQ2においては、Q1「前期の遠隔授業(オンデマンド型とskypeを用いたリアルタイム型)と後期の対面授業、どちらの方が自分にとって学びのあったものだと思いますか?」で選んだ理由を記述式で書かせたが、出席者27名全員が記入していた。対面授業を選んだ学生と遠隔授業を選んだ学生に分けた後、キーワード別にコメントを整理して表5と表6にまとめた。

表5. 「授業形態について」のQ2で書かれたコメント（対面授業を選んだ学生）

キーワード	人数	コメント内容
直接聞く／尋ねやすい	9名	<ul style="list-style-type: none"> ・対面の方が友達の見聞を聞いてわからなかったことがあっても尋ねやすいと感じたため（6名） ・他の人の意見や知らない英語表現を直接聞くことが出来た（3名）
先生／先生の解説	6名	<ul style="list-style-type: none"> ・対面だと教科書の内容に先生が補足してくださって、自分一人でやるより理解しやすかった（4名） ・先生が毎時間フレーズなどを取り上げられていましたが、対面の方が頭に入りやすく学びとなったように思うので（1名） ・対面授業の方が先生との距離が近くて集中しやすかった（1名）
コミュニケーション／人と会話	5名	<ul style="list-style-type: none"> ・対面だと、人と会話をする機会が増えるから（2名） ・この授業はリスニングとスピーキングが目的なので、対面形式の方が他の人とコミュニケーションがとりやすかった（2名） ・友達とも顔を合わせながらコミュニケーションをとれた（1名）
英語力／リスニング／スピーキング／語彙力	5名	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔授業に比べてリスニングをする機会が多かったから（1名） ・対面の方がリスニング力が身に付いたと感じた（1名） ・語彙力が増えた気がしたから（1名） ・スピーキングの時に、対面授業のほうが実践的に英語を使っているような感覚があった。リアルタイム型での授業でもスピーキングをしたが、時間をかけて仕上げた英文をそのまま読んでいるような感覚があった。対面授業では、限られた時間に英文を書き、自分で英文を考えながら話したこともあった。英語を実際に使う場合に一番近いのが対面授業でのスピーキングであると思ったので、対面授業の方が勉強になったと思う（1名） ・日本文化についてのことをペアの人と話すことで日本文化に興味を持つことができ、英語力も高まったと感じた（1名）

切り替え	1名	・自分の性格的に学校に来て授業を受けた方が、切り替えができて合っていると思うから（1名）
みんな	1名	・一つのテーマからバラバラに調べものをした遠隔授業と違い、字幕なし、英語字幕、日本語字幕の三段階に分けてみんなで同時に同じ動画を見て感想などを言い合ったから（1名）
機械のトラブル	1名	・前期の授業形態だとパソコンの機械トラブルなどで授業に集中することができなかつたため（1名）

表6. 「授業形態について」のQ2で書かれたコメント（遠隔授業を選んだ学生）

キーワード	人数	コメント内容
発表が多かった	2名	・春学期は発表が盛んにあったため（1名） ・感染防止のため、発言を極力控えることは大切だが、発表や交流の機会が失われてしまったので少し惜しかった（1名）
自分のペース	1名	・リアルタイム型は焦ってしまって分からなくなるので、自分のペースで学べるオンデマンド型のオンライン授業が自分に合っていると思うから（1名）
機械のトラブル	1名	・skypeはその時間に入れないトラブルがあったからオンデマンド型のオンライン授業がよかった（1名）

Q4はQ3「対面授業か遠隔授業（オンデマンド型＋リアルタイム型）どちらが授業に参加しやすいと感じましたか？」で回答した理由を記述式で書かせたが、出席者27名全員が記入していた。対面授業を選んだ学生と遠隔授業を選んだ学生に分けた後、キーワード別にコメントを整理して表7と表8にまとめた。

表7. 「授業形態について」のQ4で書かれたコメント（対面授業を選んだ学生）

キーワード	人数	コメント内容
通信環境	7名	・ ネット環境の不具合によって授業に出席できなくなるというような不安感がないため（7名）
友達／仲間／みんな	4名	・ 仲の良い友達と意見交流ができるため（2名） ・ 対面授業と同じ授業を受講している仲間がいるので一緒に頑張ろうという気持ちになり、自然と教室に足が運ぶから（1名） ・ みんなで同じ動画をみるのが楽しかったから（1名）
授業を受けているという感覚（実感）	3名	・ 対面授業は実際に授業に参加する感じがあってオンラインより誠実に参加できた（1名） ・ オンデマンドの方が一人で考え意見をまとめる時間が長いがやっぱりコミュニケーション英語なので、対面の方が良いと思う。一人で英語を話しているよりも他の人と同じ空間で受けることで授業を受けている実感があった（1名） ・ 学校に行って授業を受けた方が勉強した感じがするし、意見交換も楽しかったから（1名）
話しやすい	3名	・ オンラインでは自分が発表している間、人の反応がなく緊張感があったが、対面だと近くの人で意見交換をしたのでやりやすいと感じた（3名）
楽しかった	2名	・ 直接話すことができ楽しいから（2名）
集中／やりがい	2名	・ 家で授業を受けるより、対面授業の方が集中できるから（1名） ・ 対面授業の方が気持ちも引き締め、先生の声聞き取りやすく、友達との意見交換もしやすいのでやりがいを感じた（1名）
先生の説明	2名	・ 文字の説明には限界があると思う。（口頭での）言葉の説明の方が個人的には理解しやすかった（1名） ・ 会話部分でのポイントを先生が説明してくださるのをその場で聞けるのが分かりやすかった（1名）
教室が用意されている	1名	・ オンライン授業であると、学校内でどこか席を見つけて授業を受けなければならなくなる。しかし、対面であると教室が用意されているため、そのことを考える必要がなくなるから（1名）

緊張	1名	・リアルタイム型の授業だと、必要以上に緊張してしまいストレスを感じてしまうため（1名）
時間割	1名	・時間割が決まっていた方が予定を立てやすいから（1名）

表8. 「授業形態について」のQ4で書かれたコメント（遠隔授業を選んだ学生）

キーワード	人数	コメント内容
都合がよい	4名	<ul style="list-style-type: none"> ・家からでも出席でき体調や事情に関わらず参加できる（2名） ・少し遅れたら、対面授業では教室に入りにくい（1名） ・自分のペースで進められるため（1名）
クラスメイト／友達	2名	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業は、自分の意見をクラスメイトとSkypeでリアルタイムで話すことができるのが参加しやすいと思った（1名） ・オンラインの方が発表の機会や友達との交流が多い（1名）

5. 考察

5. 1 RQ1に関する考察

第一の研究課題は、「日本語および日本文化を専攻する学生は、日本文化を扱った英語の授業をどのように感じるだろうか」であった。表3から、質問項目1～6において平均値が高いことから、多くの学生が日本文化を扱った英語の授業を楽しみ、難しさを感じながらも、やりがいを持って取り組めたと捉えることができる。Q4の「日本の文化を英語で表現することで英語に自信がつかましたか？」に関しては、春学期の結果（表2）と比較すると、秋学期は平均値が伸びていて、分散も縮小している（表3）こと、また表5のキーワード「英語力／リスニング／スピーキング／語彙力」のコメント内

容から、通年で日本文化を英語で学ぶことで英語の力が身に付いたと感じ、自信がついてきた学生が一定数いることがわかる。Q1「日本の文化を英語で表現することは楽しかったですか?」は、最も平均値が高かったため、多くの学生が専門分野を英語で学習することを楽しんだといえる(表3)。また、表3のQ5とQ6の高い平均値が示すように、多くの学生が学部の特化した日本文化を扱うという英語の授業はわかりやすいと感じ、やりがいを持って取り組むことができたことがわかるので、専門分野を英語の授業で扱うことは有意義であるという示唆を得ることができた。

5. 2 RQ2に関する考察

第二の研究課題は「遠隔授業と対面授業のどちらを学生は学びのあるものと感じ、受講しやすいと感じるだろうか」であった。まず、表4のQ1の結果が示すように、全体の85.2%の学生が対面授業の方が学びのあるものであると感じており、その理由として「直接聞く／尋ねやすい」を挙げている学生が9名、「コミュニケーション／人と会話」を挙げている学生が5名いた(表5)。人と会話をする、すぐに尋ねるということは、ビデオ通話アプリやビデオ会議システムを用いてオンラインで行うことができる。しかしながら、対面の方がコミュニケーションを取りやすいと考えているということは、今後学生がオンラインで会話を行うことに慣れると結果は変わる可能性がある。

次に、6名が「先生／先生の解説」を理由として挙げているが(表5)、担当教員による解説は聞き逃しのないように文字による資料をアップロードしていたが、動画や言葉を声に出した説明にしていたら結果は異なっていた可能性もある。だが、その場ですぐに教員に質問して確認できる、という安心感を持ちたい場合や教員が近くにいることで集中できるという点は、オンラインの限界として捉えることができるかもしれない。一方で、14.8%の学生は、遠隔授業の方に学びがあったと回答しており(表4)、「発表が多かっ

た」ことを理由に挙げていた(表6)。新型コロナウイルス感染防止対策を講じながら、従来通りの発表の機会を担保できるよう教員が授業設計を工夫していく必要性を再確認できた。

さらに、Q4で遠隔授業か対面授業のいずれが参加しやすいかについて、全体の81.5%の学生が対面授業と回答し(表4)、最も多い理由として、通信環境の不安がないことが挙げられていた(表7)。インターネット環境の整備は、遠隔授業において最重要視される課題であろう。通信環境の理由以外で対面授業を支持するコメント内容に類似したものは多くなかったが(表7)、「友達/仲間/みんな」や「授業を受けているという感覚(実感)」に見られるように、「みんなで」「同じ空間」というオンラインでは実現できない要素があった。また、遠隔授業の方が参加しやすいと回答した学生は全体の18.5%であり(表4)、事情や場所に関わらず授業へ参加することができるという利便性を優先した理由が最も多かった(表8)ため、今後正当な理由により通学することができない学生への対応策として、遠隔授業を活用できる可能性が示唆された。

加えて、多くの学生は、対面授業で教員がその場で説明することで理解を深め、またその場で近隣の学生と話し合えるということに楽しみと喜びを感じている。クラスメイトと同じ動画を見るという協働学習(cooperative learning)の要素を重視した記述もあった。以上のことから、遠隔授業より対面授業が支持された結果となったといえる。緊急時の対面授業代替措置としては反転授業(flipped classroom)が遠隔授業へ寄与しても、仲間意識を高めたアクティブ・ラーニングを実行するためには、対面授業が必要であることが示唆される。

6. まとめ

本研究の結果、多くの学生が同期型・非同期型をブレンドした遠隔授業より対面授業の方を好み、受講しやすいと感じていたことが明らかとなった。

また、学部にて特化した日本文化を扱った英語の授業に関しては、多くの学生が楽しさとやりがいを持って取り組んだこともわかったため、英語学習の動機づけの一助となる可能性を見出すことができた。しかし、今回の研究対象は1クラス履修者33名であったことと、質問紙調査を行った当日に出席した27名の学生からしか回答が得られなかったことから、今後対象人数を拡大した実践と考察を行う必要がある。今回支持が少なかった反転授業 (flipped classroom) を取り入れた遠隔授業は必ずしも学生が好まないというわけではなく、大学新生でありながら仲間に会えず、一人で学習する非同期型と慣れないビデオ通話を介した同期型をブレンドした遠隔授業を経験した後に、クラスメイトと共に考え、学び合う協働学習 (cooperative learning) を行うことができたことで、対面授業の有難みを多くの学生が実感した結果となったのかもしれない。今後、遠隔授業と対面授業の利点をブレンドして、学生に寄り添いながら、よりよい英語の授業設計を考案していきたい。

注

- 1 回答した学校は1069校で、内訳は、国立大学55校 (64.0%)、公立大学72校 (70.6%)、私立大学492校 (59.7%) であった。
- 2 文部科学省 (2020) は、実際に教員と学生が教室に集まって授業を行うことを「面接授業」と称しているが、大学ではしばしば「対面授業」と呼ばれる。本稿でも、「対面授業」と呼ぶ。
- 3 教科書を入手した学生は購入者限定のアクセスキーを用いて動画を視聴することができたため、教科書をすでに入手している学生には、各自動画を見るよう指示した。教科書を入手できていなかった学生に対しては、筆者が動画の話題に関連する質問を作成し、学生はインターネットで検索し、得た情報を書いて提出するように指示した。
- 4 春学期の質問紙調査では、表2に示した「授業形態について」の設問内容が「Q7. この授業はオンデマンド型とskypeを用いたリアルタイム型の授業を組み合わせで行いました。この方法はよかったですか」、「Q8. Q7で答えた理由を教えてください」、「Q9. 英語学習は、オンデマンド型とリアルタイム型、どちらが授業に参加しすいと感じましたか」「Q10. Q9で答えた理由を教えてください

下さい」、「Q11. 秋学期の授業形態はその時にならないとわからない部分がありますが、リクエストや要望があれば書いてください」となっていた。本稿では、非同期型と同期型を組み合わせた遠隔授業（春学期）と対面授業（秋学期）を受講して、どちらが好ましいと感じたかを調査することを目的としているため、春学期の「授業形態について」の各項目の詳細な結果については割愛する。なお、Q7.の結果については、本稿2.3で言及している。

引用文献

- 天野剛至 (2014). 「短期大学における ESP 教育の可能性—EGAP を共通の核とするプログラム開発に向けての提案」. 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』 7, 301-313.
- Bergmann, J., & Sams, A. (2012). *Flip Your Classroom: Reaching Every Student in Every Class Every Day*. Washington D. C.: International Society for Technology in Education.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge UP.
- Furse, C. (2020). Lecture-Free Engineering Education. *IEEE Antennas and Propagation Magazine* 53, 176-179.
- Ge, L., Chen, Y., Yan, C., Chen, Z., & Liu, J. (2020). Effectiveness of flipped classroom vs traditional lectures in radiology education: A meta-analysis. *Medicine*, 99: 40: e22430.
Retrieved from <http://doi.org/10.1097/MD.00000000000022430>.
- 今村梨沙 (2015). 「保育士養成における ESP の有効性の考察—学習者の動機づけの観点から—」. 『同志社女子大学英語英文学会 (Asphodel)』 50, 192-204.
- 今村梨沙 (2020, 11). 「スピーキング・リスニング科目のオンライン授業実践—ESP アプローチを取り入れて—」. 関西英語教育学会 (KELES) 2020年度 (第26回) 研究大会、オンライン開催.
- 井上聡 (2021). 「遠隔授業と反転授業によるフィードバック中心の英文法指導」. 『関西英語教育学会紀要』 44, 91-100.
- Mohamad, A. E. (2020). PESPECTIVES: The New Normal 2.0. *The Journal of Portfolio Management*. Retrieved from <https://jpm.pm-research.com/content/46/7/1>.
- 文部科学省 (2008). 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」. Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afilefile/2008/12/26/1217067_001.pdf.

- 文部科学省 (2012). 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申)」 Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf.
- 文部科学省 (2013). 「Blended Learning」 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2013/08/26/1338978_06.pdf.
- 文部科学省 (2020). 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況」 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf.
- 森朋子 (2016). 「反転授業のデザイン」. 『化学と教育』 64, 596-599.
- 大橋正和 (2016). 「情報社会におけるニューノーマルという考え方について」. 『中央大学政策文化総合研究所年報』 19, 109-133.
- 澁川幸加 (2020). 「ブレンド型授業との比較・従来授業における予習との比較を通じた反転授業の特徴と定義の検討」. 『日本教育工学会論文誌』 44, 561-574.
- 武知薫子 (2014). 「ESP の新たな可能性の一考察：英語教育における他教科との部分的な科目関連携の取り組み」. 『近畿大学教養・外国語教育センター紀要, 外国語編』 5, 157-173.
- Talbert, R. (2017). *Flipped Learning: A Guide for Higher Education Faculty*. VA: Stylus Publishing.
- 津田晶子、金志佳代子、Valvona, Christopher. (2019). 『Discovering Cool Japan 発掘！ かつこいい日本—異文化理解から日本文化発信へ—』 東京：成美堂.

Appendix

秋学期振り返りシートの質問項目

振り返りシート（2020年秋学期）

各項目について該当すると思う番号を1つ選んで、各質問の→のあとに選んだ番号を書いてください。

5 = 非常にそう思う 4 = そう思う 3 = どちらでもない 2 = そう思わない
1 = 全くそう思わない

～授業内容について～

Q 1. 日本の文化を英語で表現することは楽しかったですか？

→

Q 2. 日本の文化を英語で表現することは難しかったですか？

→

Q 3. 日本の文化を英語で表現することはやりがいを感じましたか？

→

Q 4. 日本の文化を英語で表現することで英語に自信ができましたか？

→

Q 5. 学部に特化したテーマ（日本文化）を扱われていた英語の授業はやりやすかったですか？

→

Q 6. 学部に特化したテーマ（日本文化）を扱われていた英語の授業はやりがいを持って授業に取り組むことができましたか？

→

～授業形態について～

Q 1. 前期の遠隔授業（オンデマンド型とskypeを用いたリアルタイム型）と後期の対面授業、どちらの方が自分にとって学びのあったものだと思いますか？（「対面授業」か「遠隔授業」を記入）

→

Q 2. Q 1. で答えた理由を教えてください。

Q 3. 対面授業か遠隔授業（オンデマンド型+リアルタイム型）どちらが授業に参加しやすいと感じましたか？（「対面授業」か「遠隔授業」を記入）

Q 4. Q 3. で答えた理由を教えてください。Q 2. と似ていても書いてください。